連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り78

ソウェトとジャカランダ

旅行作家　山口　由美

観光業界に注目してほしいソウェトの「光」

旅をしていると、思わぬ偶然に遭遇することがある。昨年の十二月五日、ネルソン・マンデラ元南アフリカ大統領が亡くなったが、訃報を聞く十日ほど前、私は期せずしてヨハネスブルグに滞在していた。

南アフリカには、これまで何度となく訪れていたが、マンデラが終身刑を受けてロベン島に収監される以前の自宅があり、反アパルトヘイト運動の拠点でもあった南アフリカ最大の旧黒人居住区、ソウェトに行ったのはその時が初めてだった。

アパルトヘイトの時代、有色人種は法律によって住む場所を定められ、それらは「タウンシップス」と呼ばれた。ヨハネスブルグの南西にあったことから「サウス・ウエスタン・タウンシップス」、略してソウェト（SOWETO）である。

ソウェトというと、日本では、もっぱら治安の悪さが強調され、貧困層の住むスラムとして理解されている。だが、実際に行ってみると、それは、ソウェトの一面であって、すべてではないことが分かる。

人口は約四百万人。貧困層が多い一方で、少なからぬ数の中間層や富裕層もいる。モダンなショッピングセンターやホテルもあり、それらの経営者がソウェト出身の黒人であることにも驚かされた。成功して豊かになっても彼らは、ソウェッタン（ソウェトっ子）であることに誇りを持ち、ここに住み続けているのだ。随一の繁華街であるフィラカジストリートには、ネルソン・マンデラとデズモンド・ツツ大司教という二人のノーベル平和賞受賞者の家があり、２０１０ＦＩＦＡワールドカップ、そしてマンデラの追悼式典が行われたサッカースタジアムもまた、ソウェトにある。

私が滞在したソウェト唯一のシティホテル、ソウェト・ホテル＆コンファレンス・センターは、クリップタウンというエリアにあった。ソウェトの中でも貧困層の多い地域で、ホテルとは鉄道の線路を一本隔てて、スラム街が広がっている。

到着の翌日、私は、ソウェトの一日観光をホテルに依頼していた。まずは周囲を歩いて観光するという。最初の見学場所はホテルの目の前だと言われ、初めて気がついたのだが、ホテルのエントランスの真向かいに箱のような建物があった。

そこは「自由憲章」のミュージアムだった。

そうか、ここは後に新生南アフリカ憲法の基礎となる、あの自由憲章が一九五五年に採択された場所だったのだ。

ホテルが立つ「自由広場（Freedom Square）」という名前もそれにちなんでいる。「ウォルター・シスル広場」という別名は、当時、ＡＮＣ（アフリカ民族会議）の書記長だった人物の名前に由来する。マンデラは

釈放後、ＡＮＣを率いて、初めての黒人大統領に選出されるが、そのマンデラをＡＮＣに誘ったのがシスルだったとされる。ホテルの外壁には、眼鏡をかけたシスルと、そして若き日のマンデラの顔がイラストで描かれていた。

その若者の顔が当初、マンデラだと気づかなかったのは、私たちの見慣れた晩年の柔和な笑顔ではなかったからだ。客室に掲げられたマンデラの写真もまた、若き日の闘士を思わせる顔だった。自由憲章の採択後、

若き日のマンデラと、シスルの拳の上に描かれたFREEDOM CHARTER（「自由憲章」）の文字

自由広場（Freedom Square）の塔で南アフリカの民主主義の原点「自由憲章」と向き合う

ジャカランダの美しさとともに日本人観光客に見てほしい、南アフリカの歴史を刻む観光資源

間もなく彼は武装闘争のリーダーに抜擢（ばってき）される。長年、非暴力をモットーに反アパルトヘイト活動を行ってきたＡＮＣだったが、組織を非合法化し暴力で封じ込めようとする当時の政府のやり方に、平和的解決を諦めたのだ。国家反逆罪により終身刑となった彼が再び非暴力による和解と許しを説く心境に至るのは、長い獄中生活の日々においてである。

自由憲章は、民族の自由と平等、平和と友情を誓う平易な文言の十カ条から成る。広場には、条文の内容をかたどったモニュメントや条文を刻み込んだ礎石を守るように立つ塔があった。ここは、今ある南アフリカという国の原点であり、彼らが勝ち取った民主主義のありようを示す場所なのだ。

それなのに、日本語のガイドブックや観光局のパンフレットには、これらの広場やミュージアムに関する記述が一切ない。

十一月、南アフリカは、ジャカランダの季節が終わろうとしていた。紫色の小さな花が樹木いっぱいに咲き誇るジャカランダは、桜をほうふつさせるからだろう、日本人観光客に人気が高い。花の盛りの十月は、日本人マーケットにおいては、書き入れ時のトップシーズンだ。確かに花は美しい。でも、南アフリカの魅力は南米原産のジャカランダだけではないのに、と私は思う。欧米人観光客には、ソウェトの観光ツアーは人気が高く、南アフリカを旅する目的のひとつにもなっている。しかし、日本ではソウェトと聞くだけで誰もが及び腰になり、この美しい国の宝がそこにあることに気づきもしない。

訃報の後、マンデラ亡き後の南アフリカを展望する新聞記事の中にも、「影」の象徴としてソウェトのクリップタウンの写真があった。隣の広場にはこの国の「光」もあるのに、そこには言及されていない。だが、ソウェトの光に注目すべきは、ジャーナリズムよりも観光業の役割なのかもしれない。観光とは、「光」を観（み）るものなのだから。

（やまぐち　ゆみ）